2026年度　「埼玉発世界行き奨学金」親善大使レポート
地域活躍コース/シンガポール　髙橋 亜依

私はこの度2026年度の埼玉親善大使を拝命させていただき、26年8月2日から9月12日までシンガポールに留学をしてまいりました。私は大学で教育学を専攻しているため、多文化共生社会における教育の仕組みと視覚的教材の効果についてシンガポールで先行研究を見学するとともに、大使として私の地元埼玉の魅力を出会った様々な人にお伝えすることができました。ここに詳細をまとめます。

1. シンガポールの文化、宗教、教育の特徴
シンガポールは今年で独立して61年を迎える比較的新しい国です。1965年までイギリスの統治下にあり、第2次世界大戦中は日本の統治下で昭南島という名前になっていた時期もありました。



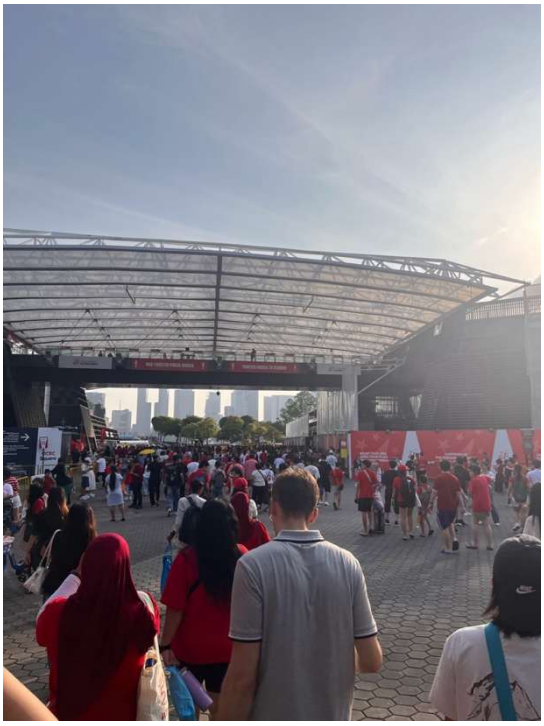
戦時中の要塞Fort Siloso, Sentosa

現地の展示によると、セントーサは海の砦として海側からの敵の侵略を防いでいたそうですが、対して日本軍は陸路であるマレーシア側から侵略し、シンガポールを降伏に追い込みました。現地では日本人と言っても温かく迎え入れてくれましたが、私は日本がそこまで侵略しているとは知りませんでした。現代は忘れがちな歴史的経緯も、時には振り返って日本人が世界でしたことを思い出して心に留めておくだけでも、海外の方との交流がより深いものになるのだと感じました。
独立のために奮闘した建国者の李光耀(Lee Kuan Yew)は当時不法居住していた多数の民族の摩擦を減らすこと、資源のない国土で経済成長させることを目標に、時には圧力によって統制を進めてきました。教育面では教育費に莫大な国家予算を投じ、国民的友愛を芽生えさせるナショナリズム的教育が幼少期から行われました。
行政システムや法律、公用語などは独立後もイギリスの方式を参考にすることが多く、身近なところでは右ハンドル左車線通行、地名でのStやAve、Rdの使用などからその雰囲気を感じられました。私が訪れた最高裁判所内では司法制度成立までのマレーシアとの会談などの歴史や、施設の建築デザインの説明が内部に展示されていました。



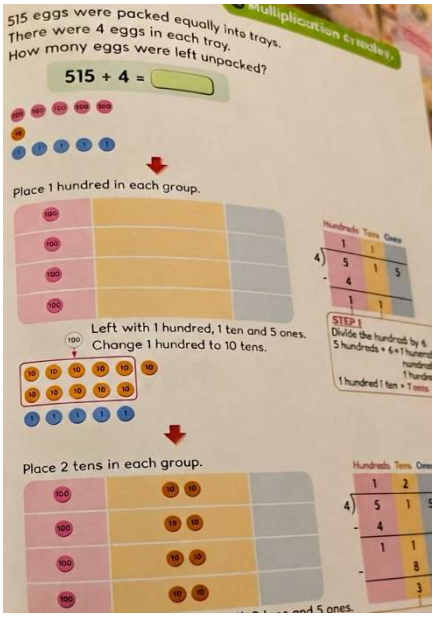

内側から見た旧最高裁判所(左)と現最高裁判所の建築模型(右)

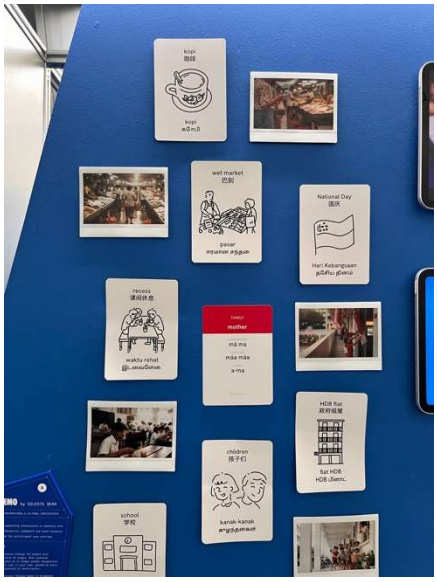
このような歴史的背景により、たとえアジア各地からの移民で構成された国だとしても人々はSingaporeanの誇りを持って自分たちの国の発展のために常に全力を尽くす国民性が感じられました。

National day paradeの様子。
学校や職場、街などが一体となった1大イベントとして位置付けられていました！

また、自分の専攻に関しては、シンガポールで特徴的な教育と視覚的な情報の伝え方について学ぶことができました。事前の調べでは、シンガポールはEdTechマスタープランを教育の国策として掲げ、AIを活用した自律的な学習を進めているとのことでした。実際に現地では書店や図書館にも紙の教科書が少なく、デジタル端末で保存してどこでもアクセスできるように学び方自体がデジタルに設計されていることが分かりました。そんななかで実際に使われている指導教材を見るためにMinistry of Education Singaporeが認定した小学校用算数の教科書を視察しました。写真のように文字での説明は多いものの、ほとんどのページがカラフルに図やイラストを使っていました。ページ数を大きく取り何種類もの例題の説明が続く構造でした。日本の算数の教科書は主に1つの例題を様々な解き方から見ていくものが多いですが、シンガポールでは1つの解き方がどんなケースにも当てはまることを確認していくように見えました。





多民族国家のシンガポールは英語でMelting potと呼ばれるようで、日本語の人種のるつぼに当たる表現だと感じました。現地で知ったのは、国民全員が公用語4つを話せるわけではなく、英語と中国語、英語とマレー語、または英語と中国語とタミル語のトリリンガル、といったように人それぞれ覚えている言語が違うことでした。現地の人に伺うと、幼い頃に自分の民族の言語を「国語」として習い、また毎日「英語」の授業もあったとのこと。幼少期から英語を習わせることで全員が最低2つの言語は話せるように育つそうです。私が思っていた言語に依存しない教育方法とは少しベクトルがずれましたが、一部のUXデザイナーさんの作品でイメージするものに近いアイデアが見つかりました。Celeste Seahさんが制作したこちらのカードは(写真左)単語とイラストというシンプルな作りで、認知症患者のケアの一環でカードごとに思い出を記録していく用途でした。児童用ではないものの、生成AIとつながった触覚体験もできる設計を参考にして、言語の壁のある子どもたちのコミュニケーションツールとして応用できそうだと感じました。このような物理的媒体も教材のありかたのひとつとして存在してよいと気づくことができました。

2. 現地の方々の埼玉への反応

　私は現地の語学学校で英語を勉強していたため、クラスメイトと地元の話をしあう機会が多かったです。その中でもTokyoの知名度は高く、行ったことあるよ！と東京旅行の思い出を話してくれる人もいました。私は埼玉を東京の隣だよと説明するとすぐに分かってくれて、次の旅行で川越に来てみてね、と私の地元の様子をたくさんお伝えすることができました。





お家を貸してくださっていたホストさんは現地のデザイン会社のマネージャーで、今進行中のプロジェクトやアイデアを生み出すコツなど、ものづくりに関する会話をたくさん交わすことができました。その際埼玉県の玩具会社であるイワコーさんのおもちゃをお渡しして、このように細部までこだわって、ユーモア溢れたおもちゃがたくさんあるよとお伝えできました。ホストさんもとても可愛い！と喜んでくださって、ご自身のデザインされたトートバッグを交換してくださいました。(右写真)



ホームステイ先のルールでお家の中の写真を公開することが禁止されていたので、写真に残すことはできませんでしたが、埼玉のお土産もとても喜んでくれていました。シェアハウス的な形でフランス人、ドイツ人、韓国人、日本人、シンガポール人が一つ屋根の下で暮らしていたため、いろいろな文化を語り合うと共に、埼玉の美味しいお菓子も皆に紹介できました。ホストさんには特に私の親戚が営んでいるお煎餅屋さんのあられせんべいが好評でした。また、同年代の留学生たちには狭山茶のティーバッグが人気でした。皆のお土産を並べてお菓子パーティーができたのが楽しい思い出のひとつになりました。

また、シンガポールでは各地下鉄駅に連結したショッピングモールがあり、そこの文房具屋さんを訪ねるとイワコーさんの消しゴムが陳列されていました。他のおもちゃよりも品数多く展開されており、埼玉発で世界中の子どもたちへ届けられているおもちゃの実態を知ることができました。

